

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成23年度派遣報告書

ーインド、ヒンディー語およびマラーティー語、H22. 7. 24-H22. 11. 5

平成 22 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 年
中山 美有紀

自身の研究テーマについて

私の研究テーマは、インド・マハーラーシュトラ州における北インド出身労働者をめぐる政治運動および社会運動である。マハーラーシュトラ州はインドの州のうち第 3 位の人口と第 2 位の面積を誇る州である。その州都ムンバイやプネーなどの州内各都市にはよりよい職業を求めて州外から多くの労働者が流入している。2001 年センサスにおいては、731 万 3000 人（州人口の約 7.5%）が州外からの移住者であった。移住者の出身州の内訳は、2001 年の統計では 1 位がウッタール・プラデーシュ州、2 位がカルナータカ州、3 位がグジャラート州であった。

中でも現在マハーラーシュトラ州政治において争点のひとつとなっているのが、ビハール州やウッタール・プラデーシュ州など北インドからの労働者の流入である。政党の中でもとりわけ再建マハーラーシュトラ・セナー (Maharashtra Navnirman Sena : MNS) 及びシヴ・セナーは、北インド出身の労働者に対するマハーラーシュトラ出身の労働者の雇用機会優遇、また州外からの労働者流入はインフラや治安などの社会問題を悪化させると主張している。

このような状況下で北インド出身の労働者たちはどのように生活し、またマハーラーシュトラ出身者たちはどのように州外からの労働者と関係を築いているのだろうか。私はこの問いに対し、地元住民、地域政党と労働者という 3 つの視点から考察したい。

研修言語概要

今回の研修では、ヒンディー語およびマラーティー語両言語の研修を行った。ヒンディー語は現在インド（主に北インド）とネパールなどで話されており、マラーティー語はインド西部のマハーラーシュトラ州で日常的に話されている言語である。両言語ともデーヴァナーガリー文字を使用しており、共通語彙や文法にも類似性がある。ただし、マラーティー語はヒンディー語に比べサンスクリット起源の単語・文法が多いという特徴がある。

言語研修の内容について

今回私は 7 月 24 日よりマハーラーシュトラ州プネーにおいて知人の家にホームステイをさせていただきながら、Mrs. Sneha Bahulikar 先生に 8 月 1 日から 10 月 31 日までの 3 ヶ月間ヒンディー語およびマラーティー語の授業をして頂いた。授業計画の段階で、ヒンディー語とマラーティー語の語彙および文法等の共通点を指摘され、まずは汎用性があり私も少し学習していたヒンディー語の授業からはじめることとなった。当初は 1 日 1 時間の予定であったが、2 週目から 1 時間半となり、9 月からはマラーティー語 1 時間半・ヒンディー語 1 時間計 2 時間半の授業となった。

ヒンディー語およびマラーティー語はともに現地のイングリッシュ・ミディアムの生徒向け教材を使って学習した。基本的な文法事項と単語を抑えながら、公式・非公式な手紙の書き方や短い文章の読解、終盤には短い新聞記事の読解なども指導していただいた。また授業以外では、毎日ヒンディー語とマラーティー語で 5 文ずつ日記を書く課題があり、これによって授業で学んだことやホームステイの生活の中で習得した表現を実際に使っていくトレーニングをした。またホームステイの受け入れをくださった家庭の中で、ガネーシャ祭やディワリ祭など多くの文化的行事を体験することができ、1 人で暮らしているとわからないような宗教的儀式の名前や神話伝承などを知ることができた。

印象に残った体験・経験など

私の滞在した 7 月から 10 月は、大きな祭が続く時期であった。一番プネーが賑わいを見せたのは、9 月に祝われたガネーシャ祭りであった。祭りの始まる 9 月 1 日の数週間前から道路のあちこちにガネ

ーシャ神のためのステージ設営が始められ、祭りの始まった次の日の朝の新聞には「ガネーシャ神来た」という見出しとともにガネーシャ神の写真が大きく取り上げられていた。私達の家では家の祭壇に粘土に彩色したガネーシャ神を迎え、毎日朝夕に親戚一同が集まってアールティ（神を歓迎する儀式）を行った。その神像を最初は少しけばけばしく感じていたのだが、家族がマントラを唱えるのにあわせて見よう見まねで一緒にマントラを唱えると、徐々に私にもガネーシャ神への愛着がわいてくるようになった。神像を最終日に川に流して帰ってくるとなんとなく寂しく感じられ、プネーの人々にとって神の到来が一年の風物詩となっていることを実感した。

課題達成度と反省点

私の目標はまずマラーティー語とヒンディー語を区別できるようになること、両言語を研究に使うための基礎的文法事項および語彙を習得することであった。マラーティー語とヒンディー語の区別は研修を始めてすぐつくようになり、基礎的文法事項は両言語ともに10月半ばには学習を終えた。10月頃からマラーティー語で簡単な自分の意思を伝えたり質問したりできるようになり、11月には、話題は選ぶもののマラーティー語で家族の会話に入れるようになった。また研究の一環として地域政党のオフィスを訪れた際にもマラーティー語で質問ができた。

反省点は、新聞や雑誌・書籍等の記事やテレビ等教材以外からのインプットが中々できなかったこと、また周囲の人々が英語や日本語を学習していたためそちらでコミュニケーションを取った面があった点である。ただ日本語を学習している方とのつながりができたので、言語交換という形で言語学習を継続していきたい。



図 1: ガネーシャ祭最終日に神像を川に流す祭のスタッフ



図 2: Bahulikar 先生と筆者



図 3: Maharashtra Navnirman Sena のオフィスの扉